「香港アジア・フィルム・フェスティバル2024」の現地報道から

「香港アジア・フィルム・フェスティバル　2024」は、10月17日から11月10日まで開催されますが、「サウス・チャイナ・モーニング・ポスト」10月15日付け紙面に掲載されたジェームス・マーシュのベスト10の作品を紹介しましょう。イギリス生まれのジェームス・マーシュは2001年以降、香港を拠点としフリーランスの映画評論家・ジャーナリストとして活動を続ける人物です。マーシュはまず、「香港アジア・フィルム・フェスティバル2024は、近年にない野心作が集まった印象が強く、世界的な映画祭ですでに高い評価を受けたアジアの作品も出品されています。今年は、カザフスタンの新作に注目が集まり、またパレスチナの映画作家たちがイスラエル・ガザ戦争を映像にどう捉えているかにも関心が寄せられています。新たな才能の発見にも期待ができます」と述べたところで、彼の選んだ10本の作品が紹介されます。

1.　「THE LAST DANCE」

アンセルム・チャン（陳茂賢）監督作品。アンセルム・チャンは2023年にも「READY OR ROT」（「不日成婚2」）で話題を集めた監督ですが、本作はCOVID-19パンデミックの影響で経営危機に陥ったウエディング・プランナーの主人公（黄子華）が葬儀屋に商売替えをすることになり、墓を掘り返し亡骸を取り出すという仕事をするハメになります。そこに人生を宗教のために尽くす道教の僧侶が現れ二人でビジネスをやっていくという内容です。この作品のポイントは、香港を代表する二人のコメディアン、黄子華と許冠文（マイケル・ホイ 1942年生まれの香港コメディ界の大御所）の初共演で、「希望にあふれた」作品として紹介されています。

2.「PAPA」

フィリップ・ユン（翁子光　1979～）監督作品。フィリップ・ユンは、「九龍猟奇殺人事件」（2015）、アーロン・クォック、トニー・レオン主演「風再起時」（2022）といった話題作を送り出してきた監督。2010年に実際に起きた事件、母と妹を殺害した十五歳の少年の父親を描いた作品です。愛する二人の家族を失った父親をその亡霊に取り憑かれたかのように精神的に不安定になり、殺人を犯した息子のことをどうしても許すことができません。これまでのフィリップ・ユンの作品の中でも、困難な状況の中からでも希望とヒューマニティを見出していこうとし、社会の中にある深い闇を暴いていくという探究心と真摯さにあふれた作品です。

3.「THE WAY WE TALK」

アダム・ウォン監督作品（黄修平 1975～）監督作品。アダム・ウォンは聾唖者の香港人たちの行く末を危惧しながら、広東語手話通訳の存在を取り上げます。この作品には三人の若者が登場し、聾唖者とのさまざまな交流を描いていますが、一般には会話を通してのコミュニケーションしか用いようとしない人たちがほとんどで、聾唖者にとっては非常に困った状況に置かれているのです。この若者たちは、こうした点に理解を示し、信頼を得ています。これまでの聾唖者への理解のない行動を、ここでは危険なシグナルとして提示します。センシティブな表現を用いて、聾唖者に対しての理解のない行為に警鐘を鳴らす作品です。

4.「HAND ROLLED CIGARETTE CINE-CONCERT」

チャン・キンロン（陳健朗 1990～）監督作品。この作品はチャン・キンロンが2020年に発表したクライム・スリラー作品で、南アジアの都市の人々をリアルに描いたところがとりわけ注目に値するところであり、大いに注目を集めた作品ですが、香港アジア・フィルム・フェスティバル2024では、この作品のために初めてのライブパフォーマンスとしてのシネ・コンサートが行われました。オリジナルの楽曲の作曲はアイリス・リウ、ハンズ・オウが担当し、トランペッターのアトラス・ルー、サウンドデザイナーのカレン・ユーが参加しています。

5.「 HAPPYEND」

空音央（ネオ・ソラ　1991～）監督作品。空音央は「Ryuichi　Sakamoto/Opus」で鮮明な印象を与えデヴュウを飾りましたが、本作は香港アジア・フィルム・フェスティバル2024でも最も注目を集める監督の一人として挙げられます。近未来の日本を舞台にした極めて刺激的な社会風刺に徹して作品であり、反抗的な態度のティーンエイジャーたちが学校の校長に悪戯を仕掛けるのですが、それが裏目に出てしまい抑圧的な監視システムの導入を促すという事態に発展します。高校という場を社会の一つの縮図として捉え、空音央の作品は、検閲制度・権威主義的規則・表現の自由の抑圧といった多様な問題提起を行う作品に仕上がっています。

6.「GRAND TOUR」

ミゲル・ゴメス（ポルトガル　1972～）監督作品。ミゲル・ゴメスの最新作はシネマティック・オデッセイとも呼べるもので、奇跡的とも言える内容に満ちた作品です。物語は二十世紀初頭のビルマのラングーンに駐在する一人のイギリス人の官吏の話ですが、彼は結婚式を途中で抜け出し、アジア各地を回る旅へと出発します。タイ、ヴェトナム、フィリピンでのロケを敢行しますが、新型コロナウィルスのパンデミックのため広大な中国ロケはゴメスの拠点のポルト

ガルのリスボンからの指示によって行わざるを得ない結果となりました。ドキュメンタリーとフィクションの要素が絶妙に入り混じり魅力ある作品に仕上がりました。現代と当時の時代的対比の描写の素晴らしさが際立っています。

7.「ALL WE IMAGINE AS LIGHT」

パヤル・カパディア（インド 1986～）監督作品。本年度のカンヌ映画祭でグランプリを獲得した本作品は、現在のムンバイという大都市に流入し続ける人々を描いた美しい物語です。看護士という職業で繋がる三人のそれぞれ年齢の異なる女性を主人公に、カパディアは彼女たちの送る長時間労働の日々の生活を確かな観察眼で捉え、彼女たちの複雑な人生の中で感じる無数のプレッシャーを描いていきます。カパディアの鋭いドキュメンタリー作家的な観察眼はインドの喧騒に満ちた大都市ムンバイの騒然とした不協和音の中に観客を引き込みます。ヴィヴィッドな色彩感、シャープな画面構成、映画監督の経験も持つ作曲家のTopsheによるエレクトリックな音楽が一層の効果を上げます。2024年の最も完成度の高い優秀作品の一本として評価できる作品です。

8.「LOVE IN THE BIG CITY」

E.oni監督作品。Park Sang-young の同名小説の映画化でKドラマシリーズの流れを汲んだものと言えます。ロマンティックで爽やかな印象を与える娯楽性に富んだコメディ作品です。主演のKim Go-eun とNoh Sang-hyunの二人は、実に対照的ば性格の持ち主ですが、常にその関係は率直でプラトニックな友情と愛情の中で進んでいきます。監督のE.oni の本作は今年の韓国映画のナンバーワンの呼び声も高く、見事な演技を引き出すと共に、シャープな会話の目立つ脚本で都会生活の倦怠感を表現しています。

9.「STEPPENWPLF」

アルディハン・イエルジャノフ（カザフスタン 1982～）監督作品。ここ数年ライターとしての活動を続けるアルディハン・イエルジャノフは、本作では荒涼たるカザフスタンのステップ地帯の大自然の中で、彼好みの不条理でどこか一風変わった舞台設定の中で作品を制作し、アートハウス系の人々からの支持を集めています。本作での受賞実績を基に映画界の主

流派としての地位を確立するのではないかという声も上がっています。この作品はジョン・フォードの「捜索者」（1956）、ニコラス・ウィンディング・レフの「ドライブ」（2011）の影響を多分に受け、命知らずの若い母親が内乱の発生で混乱した状況の中で、行方不明になった幼い子どもを救出するために卑劣な警察の捜査官に立ち向かう姿を描きます。

10.「GESUIDOUZ」

宇賀那健一（1984～）監督作品。宇賀那健一は日本の活気に満ちたホラー映画のジャンルで最もホットな若手映画作家の一人であり、本作を見ればその理由も簡単に理解することができるはずです。アナーキーでホラーをテーマにした高い志を備えたパンクバンドを描いた古典的な趣さえあるカルト映画である本作では、リードシンガーのはなこはイギリスのグラストンベリー・フェスティバルに出演することを夢見ているが、彼女が憧れるジム・モリソンとカート・コバーンが二人とも二十七歳で亡くなったことを強く意識しています。そして、自分も二十七歳という年齢にデッドラインを設定し、それに向かって次第に高まるドラスティックな状況の中で一年間という時間を過ごしていきます。

「東京国際映画祭2024」のコンペティション部門に、フィリップ・ユン「PAPA」（邦題「お父さん」）、ワールド・フォーカス部門にアンセルム・チャン「THE LAST DANCE」（邦題「ラスト・ダンス」）が出品されることを付け加えておきましょう。